

2-2. アクティブ・ラーニング学外調査：東京理科大学訪問調査報告

日時：平成 28 年 9 月 15 日（火）10：00～12：00

場所：東京理科大学

訪問者：吉田博（総合教育センター講師），久保田祐歌（総合教育センター助教），新原将義（総合教育センター特任助教）

対応者：満田節生氏（理学部第一部物理学科教授），今村武氏（理工学部教養教授），深谷公男氏（大学企画部次長），吉沢昭範氏（大学企画部学事課主任），斉藤美佳氏（大学企画部学事課）

1) 調査目的

ラーニングスキルの習得を目的としたアクティブ・ラーニング型初年次教育の実地調査を行い、授業体系、授業運営、教材、学修評価等の概要を把握し、SIH 道場の授業設計に反映するために、東京理科大学への訪問調査を行った。東京理科大学は、平成 26 年度大学教育再生加速プログラムのテーマⅠ（アクティブ・ラーニング）、テーマⅡ（学修成果の可視化）の複合型で採択されている。アクティブ・ラーニングを推進する上では、学修成果の評価方法についても先進的取組を参考にする必要があるため、複合型で採択されている東京理科大学を訪問調査の対象とした。

2) テーマⅠ「アクティブ・ラーニング」に関する取組

テーマⅠでは、「授業収録配信システム」の整備によるアクティブ・ラーニングの促進を目標とした事業が展開されている。「授業収録配信システム」は、教室内に設置したカメラで授業等の映像及び音声を収録し、その映像等をデジタル教材化し、インターネット上で配信・閲覧できるシステムである。東京理科大学ではこの「授業収録配信システム」によって作成したデジタル教材を、主に反転授業の教材として活用し、これによって授業内の時間をこれまでの知識伝達ではなく議論や質疑に費やすようにしていくことでアクティブ・ラーニングの推進を図っている。

また「授業収録配信システム」によって作成されたデジタル教材は、反転授業だけではなく、演習問題の解説や学生の復習、教員自身の振り返り等にも活用できるといったように、様々な活用方法が想定されている。実際に、これまで作成されたデジタル教材の利用状況から、授業を受講する前に課された動画視聴だけでなく、授業終了後にも学生が自発的にデジタル教材を視聴していることが明らかになっており、また学生からの反応も非常に良好とのことである。

こうしたシステムの運用により、平成 28 年度には 250 の授業においてデジタル教材の収録・作成を行っており、今後さらにコンテンツを充実させる予定であるとのことであった。

3) テーマⅡ「学修成果の可視化」に関する取組

テーマⅡの取組として東京理科大学では、「学修ポートフォリオシステム」の導入による学修成

果の可視化を目指した取り組みを展開している。学修ポートフォリオの意義として (1) 学修家庭や学修成果を示す資料 (成果物) を一元化して蓄積して、学生が 4 年間の成長プロセスを俯瞰できる、(2) 学生が学修ポートフォリオを通して定期的に自身の学修プロセスを振り返り、学修の到達度と次に取り組む劇課題を認識することができ、継続的な学修の定着につながる、(3) 学修ポートフォリオを通して、学びの視点 (学生の視点) と教育の視点 (教員の視点) を可視化・共有することができる、などの意義が挙げられている。

また、東京理科大学では学科のディプロマ・ポリシー (DP) が学生にとっては抽象的すぎる、DP と学科のカリキュラム構造を伝える科目系統図との間に乖離がある、などの問題を解決するため、DP を分解し、学科のカリキュラム構造と対応させた独自の「TUS ルーブリック」が作成できるようになっている。この TUS ルーブリックは学科固有のものであり、教員は毎年これを更新させることが可能となっている。

さらに、東京理科大学の学修ポートフォリオシステムでは、学生自身による主幹評価を基にした「主幹評価レーダーチャート」と、成績ベースでの客観評価を基にした「全学期統合客観評価レーダーチャート」が学生に提示されるようになっている。このレーダーチャートでは全学生の平均値も表示されるようになっており、学生はこれらを比較しながら半期ごとにふりかえりを言語化して蓄積し、次の半期の目標設定をすることが可能となっている。

4) おわりに

学修ポートフォリオシステムやレーダーチャートの運用方法は、徳島大学の今後の取組にも大いに参考となるものであった。また面談のなかでは、学内への周知の方法やその現状についても意見交換が為され、今後の事業展開や学内での周知方法について有用な議論が交わされた。